

親鸞仏教センター通信

2009.
June

2009年6月1日発行

発行者 本多 弘之

編集・発行 親鸞仏教センター(真宗大谷派)

〒113-0023 東京都文京区向丘 1-13-7

TEL. 03-3814-4900 FAX. 03-3814-4901

e-mail shinran-bc@tomo-net.or.jp

ホームページ <http://shinran-bc.tomo-net.or.jp>

第30号

カイロモンの存在

親鸞仏教センター研究員 山 本 伸 裕

フェロモンと呼ばれる生化学的信号物質が、同種の生物の個体間ではたらく誘引物質であることはよく知られている。それに対して、カイロモンなどと呼ばれる、異種個体間に作用する誘引物質が存在するという。たとえば、私たちはどうして孔雀の羽を美しいと感じるのか。これはあまり正確な言い方ではないけれども、そこに孔雀と人間とに共通して美しいという感覚を呼びさますカイロモンのような何かが存在していると考えることができる。

これから一大転換期を迎えるであろう人類にとって、人間もまた「カイロモンの存在」であるといった自覚をもつことの大切さを提唱するのは、社会学者の見田宗介氏である。20世紀の人間にとって、森林などは基本的に伐採の対象としか見なされなかったといって過言ではない。しかし、目の前で森林が実際に切り崩されていく光景には、多くの人が少なからず心の痛みを感じるものなのではないか。

森林は、人間にとってものの言わぬ他者であって、人びとはそこに畏敬の念すら抱いたものである。なぜ、多くの人は、森林をむやみに切り崩してはならないという心の声を聞くのであろうか。それは、人間という生物にとって、理性的あるいは合理的な判断をはるかに超えたところからやってくる、カイロモンのような何かからの呼びかけである、と受け止めることは、決して無意味なことではないのではないか。

近代以降、経済活動を中心とした人類のさまざまな活動は、いわばフェロモンのようなものに誘引されるかたちで展開されてきたと言える。そのことが私たち人類にもたらしてくれた恩恵は測り知れない。しかしながら、いまやその多大な恩恵が、人類のみならず地球上のあらゆる生物の危機の元凶であることが明らかになりつつあるのである。仏教的に表現すれば、「自利害他」の振る舞いが、結局のところ「自害害他」の結果をもたらしつつあるということであろう。

人間もまた、カイロモンの存在であるという感性を取り戻すことは、自らのいのちのありようを、より広い視点に立って「空想」してみるということにほかならない。その際、どこにそのような物質があるのかといった問いは、ほとんど無意味であると言いたい。カイロモンの存在である人間が、美しいものを美しいと感じ、ときにはそこに言い知れぬ畏敬の念すら抱いてしまう。大事なことは、その畏敬の念の源泉を物質的に突き止めることなく、それについてどこまでも思いを馳せ続けることなのではないか。そうした「空想 (イマジネーション)」だけが、地球上のあらゆるいのちあるものの価値についての、どこまでも開かれた問いかけを可能にしてくれるであろう。

親鸞仏教センター連続講座「親鸞思想の解明」

「浄土を求めさせたもの—『大無量寿経』を読む—」⑩

無限なるものの小さな芽吹き

親鸞仏教センター所長 本多 弘之



本多弘之 所長

連続講座「親鸞思想の解明」は、「浄土を求めさせたもの—『大無量寿経』を読む—」の第22回、23回が、東京国際フォーラム（有楽町）で行われた。第22回では、「本願文（第四願〈無有^{むいう}好醜^{こうしゆ}の願〉）」について、第23回では、「本願文（第五願〈宿命通^{しやくふつう}の願〉）」についてセンター所長・本多弘之が問題提起をし、有識者・一般参加者の方々と間で活発な質疑応答がなされた。ここでは、先に行なわれた第19回からその一部を紹介する。

（嘱託研究員 越部良一）

■ 本願のわかり難さ

本願とは何だといったなら、有限と無限の矛盾を突破して、無限が有限のところに形を顕^{あらわ}そうという願い。有限が有限の中で何か自分の好きなことを要求するというのが、普通は願いという言葉でしようけれど、そういう願いという言葉を使いながら、方向がある意味で逆である。つまり、有限が無限になっていこうとか、自分の所有欲を無限にふやしていこうとか、有限の状況を自分に都合のよいようにどんどん変えていこうとか、そういう願いではない。まったく逆に、無限なるものが、有限なるところに、有限が本当にたすかる可能性を開く。

その本願とは何であるかということがわかり難い。人間の願いの一種であろうと考えて聞きますと、何の意味があるのかよくわからない。かといって、人間の願いではない願いなのかなどといくら言われても、これまた何もわからない。人間の側から起こす願ではなくて、人間に

向かって起こす願。これはわかり難い。人間がものを考えるときに、自分からものを考えますから、自分に向かってくるという発想をしても、わかり難い。

よく一般に、浄土教の願について、願われているという言い方をします。自分は如来から願われている身だという教え方をする。受身形で願を感じよと。これも、どうもわかったようでわからない。例えば、子どもは親からきちんと育て欲しいと願われているのではないかと。ちょうどそのように、われわれ凡夫は、如来からちゃんとたすかって欲しいと願われているのだと。願われている存在として自分を感じよと。まあ、譬喩^{たとえ}としてはわかり易い。けれども、譬喩はわかるけれども、如来との関わりはわかり難い。如来がどこにいるのかわからないのに、それから願われているとはどういうことだと。つまり人間から無限を考えて、無限を如来とか仏とかという言葉で表しても、人間から考えた場合にはどうしてもわからない。

向こうからこちらへはたらいて来て、こちらに発起^{はつぎ}する。ですから、起こる事実は、われわれの有限のところに何らかの形で発^{おこ}らなければ、われわれはわからない。単に受身形ではわれわれはわからない。そこが、私自身も長い間教えを聞きながら、何か論理がごまかされているような感じがして、譬喩では、情念的にはわかるけれど、どうもわからない。お前は如来の大悲に救ってやりたいと願われているのだと思えと言われても、全然、救ってもらえるようになっていく気配がないではないかとしか感じら

れない。どうもそこがわからないという感じであったのです。

■ 内になった他

つまり、他力というのは、自分があって、外に他力があるという発想ではないのです。親鸞が、他力は本願力だと言うときには、その本願力は内になった他、内在になった超越です。その内になった他ということをはっきりと示そうとして、非常に苦労された。単なる外であれば、お前は本願によってたすけられるのだ、お前は本願によって願われているのだ、そういうように受身形でものを考えろと、そういう論理でたすかるということなのでしょうけれど、どうもそれで親鸞という人は納得できなかった。むしろ、自分の積極性といいますか、自分の中に発するものの平等性、そういうことを明らかにしたかった。

だから、どうしても親鸞聖人にとっては、本願成就の救いは回向を潜^{ひそ}かなければならないわけです。如来の回向ということは、無限なるものが有限に転ずる。自己を転じて他となって、他自身を救う。そういうのはたらきを回向ということです。だから、無限なるものが有限になって、有限を無限に転ずるという仕事をする。そういうのはたらきがないなら、大悲が衆生を救うということが、事実として衆生のうえに起こらない。そのために、親鸞は、回向成就の信心ということをはっきりと明らかにしようとした。

私は、親鸞の表現するそうした救いに、非常に現代的な、本当に主体が成り立つ意味があると思うのです。主体なしに、ただ、受身形だけになれと。まあ、絶対受動という言い方もありますけれど、受け身になるためには、ひとまず受けるべき主体がないと受身形にもなれないわけです。何もないのに、受身形ということはあり得ない。まあ、柔道で、自分がばーんと倒れるのを受け身と言いますが、自分が倒れるのであって、何もないのに倒れるということは起こらないわけです。倒れるべき自分があって

始めて倒れるわけです。そこに、我執が深く、罪が深いこの自分が大悲によってたすけられるという、その事実が発る基点がある。

単に有限と無限とがあって、そういう相対するものがある、無限が有限をたすけてくれるのだという、そういう論理だけでは人間はたすからない。そこが、親鸞聖人という方が、回向という言葉をはっきりと大事な言葉として取り出して、回向の救い、つまり教・行・信・証、すべては回向であると。回向において始めて救いが成り立つということを徹底して言わざるを得ない問題がある。回向を潜^{ひそ}かにすることによって、無限は単なる他ではない。無限が有限となって有限を無限にするという、そういう大きな動きをもった概念になる。相対概念ではなくて、相対を破^{やぶ}ってはたらき出す概念になる。そういうことを、回向ということで顕^あそうとされたのではないかと思うのです。

何かがわれわれに起こる。有限が無限に触れる可能性が、たねが小さな芽吹きをもったように、そこに芽を出す。そのわれわれの中に発ったものが、無限なるものの芽を本当にもち得る。そういうことが、無限の側からののはたらきとして有限の側に起こり得るということをはっきりと何とかなおうとする。そこに、本願という言葉で言おうとする意味があるのではないかと思うのです。

(文責：親鸞仏教センター)

公開講座「親鸞思想の解明」のご案内

本講座は公開（無料）で開催しています。

記

日時：2009年6月30日(火)午後6時30分～9時

7月17日(金)午後6時30分～9時

8月21日(金)午後6時30分～9時

場所：有楽町・「東京国際フォーラム」Gブロック

JR、東京メトロともに「有楽町」駅より徒歩1分

テキスト：『真宗聖典』大判 ¥3,500、小判 ¥3,000

ご希望の方は、下記（京都・東本願寺出版部）まで。

TEL 075-371-9189 FAX 075-371-9211

<https://books.higashihonganji.jp>

いりぬるによりて、かならず大涅槃にいたるを、法性のみやこへかえるともうすなり。

(原文は、東本願寺発行の『真宗聖典』五四九頁)

語 註

①【方便】ここで言われる方便は「善巧方便」のことである。方便なくしては真実に触れることの出来ない我れに呼び掛けるために、言葉になったり形となって用らく。すなわち、形なきもの(真実そのもの)が形を通して呼び掛ける。それを善巧方便というのである。

②【来迎】浄土を願う人の臨終に仏・菩薩が迎えに来ること。これが浄土教の伝統的来迎観であった。これに対し、親鸞は真実の信心の立場から、浄土から用らいて衆生を浄土へ来させる用らきとして、すなわち「如来の回向」として「来迎」の意味を捉え直している。

それに関連することとして、親鸞は門弟に向けた手紙に、来迎は諸行往生にあり。自力の行者なるがゆえに。臨終ということとは、諸行往生のひとにいうべし。いまだ、真実の信心をえざるがゆえなり。(中略)真実信心の行人は、摂取不捨のゆえに、正定聚のくらしいに住す。このゆえに、臨終まつことなし、来迎たのむことなし。信心のさだまるとき、往生またさだまなり。

と記し、来迎は自力の行者が願うことであるとしている。

(『末燈抄』真宗聖典六〇〇頁)

試訳をめぐって

【原文】誓願真実の信心をえたるひとは、摂取不捨の御ちかいにおさめとりて、まもらせたまうによりて、行人のはからいにあらず。金剛の信心をうるゆえに、憶念自然なるなり。

【現代語訳】誓願のまことから生じた信心を得た人を誰一人漏らすことなく救うという誓い、それにおさめとり、護ってください。これは、行為する人間の側のはからいによるものではない。堅く決して壊れることのない信心をうるということは、憶念の起こるが起ることということである。その憶念することも自然である。

によつて、信心が起ることということも必ずから与えられる結果である、と知ることができるということである。「来迎」というのは、「来」は、浄土へ来させるといふことである。これは、もしあらゆる人々が浄土に生まれることが出来ないならば、決して仏には成らないという阿弥陀如来の誓いをあらわすことばである。人間の迷いの世界を捨てさせ、如来の真実がはたらいいて世界へ来させるといふこと、すなわち、本願他力をあらわしているのである。また「来」は、かえるということ、すなわち、本願の海に入つたならばどのような人々であらうとも、必ず、阿弥陀如来と同等の覚りの世界に至ることが出来る、それを「法性のみやこへかえる」というのである。

原文によれば「誓願真実の信心をえたるひとは」というのだから、一見して主語は信心の行者であるかのように思われる。そのように読んだ場合、「金剛の信心をうる」ことも「憶念」ということも、その主語は当然、信心の行者となるだろう。しかし、原文ではこの後に、信心の起こる根拠として釈迦・弥陀を挙げ、「これ自然の利益なりとするべし」と統一していく。すなわち、信心が起ることも、信心それ自体も、憶念することも、全て「自然の利益」だといふのである。

「行人のはからいにあらず」という言葉を大切にしながら、「一切の根拠は如来にある」という、これを如何に表現するかがこの現代語訳を行うポイントとなった。(訳・語註…親鸞仏教センター)

『aṅjali』第17号および

『現代と親鸞』第18号を刊行

このたび、『aṅjali』第17号(写真上)並びに『現代と親鸞』第18号(写真下)を刊行しました。

『aṅjali』第17号では、立教大学文学部教授の河野哲也氏、東京大学大学院総合文化研究科教授の山内昌之氏、報道写真家の高橋邦典氏、政治学者のチャールズ・ダグラス・ラミス氏、経済学者の川本裕子氏、惑星科学者の松井孝典氏、元NHKアナウンサーの山根基世氏、東京女子医科大学名誉教授の神津忠彦氏、仏教学者の竹村牧男氏など、10名の専門分野の方々に、現代社会の課題や最先端での苦闘についてご執筆いただいています。

一方の『現代と親鸞』第18号では、研究論文(楠宏生研究員・越部良一嘱託研究員)のほか、「現代と親鸞の研究會」から山形大学人文学部教授の松尾剛次氏、「テーマ別研究交流会」から哲学者の内山節氏の問題提起と質疑、「現代の諸課題と対話する研究會」から総合研究大学院大学教授の池内了氏のインタビュー内容。また、大谷大学非常勤講師の羽塚高昭氏(元親鸞仏教センター研究員)の鈴木大拙訳『英訳 教行信証』研究ノート。さらに、「親鸞思想の解明」から本多弘之所長の問題提起(3講座分)を掲載しています。



『聖典』の試訳（現代語化）

「浄土」と聞いて、多くの人は死後の世界としてこの言葉を理解するのではないだろうか。むしろ、死後の世界ということであれば、キリスト教の「天国」という言葉のほうが、現代においては馴染むのかもしれない。宗教の違いはあっても、あえてそこに共通した概念を見いだすならば、それは未だ誰も見たことのない理想郷である、ということになるだろうか。

しかし、親鸞の浄土観はそれとは異なるようだ。死といういのちの厳肅なる事実を希釈する、すなわち慰めの場所としてイメージされる「浄土」に対し、親鸞はもつと積極的な意味で「浄土」という言葉を使い、展開させてゆく。「大涅槃」と言い、「法性のみやこ」と言う、そこに一貫するのは現世をつらぬく《如来の大いなるはたらき》である。

相對概念として語られる、浄土と穢土。しかし、それは別世界であって別世界ではない。穢土を包み込んで用らく《浄土》。その境は何かと言えば、穢土に執着してやまない自我心の「翻り」である。

（囑託研究員 法隆誠幸）

『唯信鈔文意』試訳 ⑥

原文

誓願^{せいがん}真実^{しんじつ}の信心^{しんじん}をえたるひとは、摂取^{せつしゆ}不捨^{ふしや}の御^{おん}ちかいにおさめとりて、まもらせたまうによりて、行人^{ぎやうじん}のはからいにあらず。金剛^{こんこう}の信心^{しんじん}をうるゆえに、憶念^{おくねん}自然^{じぜん}なるなり。この信心^{しんじん}のおこることも、釈迦^{しやか}の慈父^{じふ}、弥陀^{みだ}の悲母^{ひも}の方便^{ひんぽう}によりて、おこるなり。これ自然^{じぜん}の利益^{りやく}なりとしるべしとなり。「来^く迎^{よう}」というは、「来^く」は、浄土^{じやうど}へきたらしむといふ。これすなわち若^{にや}不生^{ふじやう}者のちかいをあらわす御^{おん}のりなり。穢土^{えいど}をすてて、真実^{しんじつ}報土^{ほうど}にきたらしむとなり。すなわち他力^{たうりき}をあらわす御^{おん}ことなり。また「来^く」は、かえるという。かえるというは、願海^{がんかい}に

現代語訳

誓願^{せいがん}のまことから生じた信心^{しんじん}を得た人を誰一人漏^もらすことなく救うという誓い、それにおさめとり、護^{まも}つてくださる。これは、行為する人間の側のはからいによるものではない。堅^{かた}くて決して壊^{こわ}れることのない信心^{しんじん}をうるということは、憶念^{おくねん}のことが起こるということである。その憶念^{おくねん}することも自然^{じぜん}である。この信心^{しんじん}が起こることも、慈父^{じふ}のように教え導^{みち}いてくださる釈尊^{しやくそん}、悲母^{ひも}のように包んでくださる阿弥陀^{あみだ}の大いなるはたらきによるものである。これ

親鸞仏教センターの動き

（2009・3・5）抄出

■2009年

- 3・1 研究誌「現代と親鸞」第17号、「親鸞仏教センター通信」第29号を発行。
- 3・2 第23回（通算・第74回）連続講座「親鸞思想の解明」（東京国際フォーラム）
- 3・6 第35回「唯信鈔文意」研究会
- 3・9 第80回清沢満之研究会
- 3・10 第32回現代と親鸞の研究会「持続可能な社会への転換―「低炭素社会」実現に向けて―」
- 3・13 国立環境研究所特別客員研究員・西岡秀三氏（千代田区・アルカディア市ヶ谷）
- 3・26 親鸞聖人ご命日のつどい
- 4・1 第108回英訳「教行信証」研究会
- 4・2 第11回鈴木大拙訳「教行信証」の考究
- 4・2 第81回清沢満之研究会
- 4・2 第36回「唯信鈔文意」研究会
- 4・10 第82回清沢満之研究会
- 4・14 第12回鈴木大拙訳「教行信証」の考究
- 4・21 第7回「親鸞仏教センターのつどい」記念講演「経済の豊かさと生きることの豊かさと」
- 4・23 埼玉大学名誉教授・嵯峨淑子氏、「信心の養育」親鸞仏教センター所長・本多弘之（千代田区・学士会館「本館」）
- 4・27 第14回英訳「教行信証」再版編集会議
- 5・1 人事発令（辻本倫書記が総務部書記に発令）
- 5・8 人事発令（京極孝文主事が教育部主事に発令）
- 5・12 大江覚成主事補、鈴木真記書記が発令）
- 5・13 親鸞聖人ご命日のつどい
- 5・15 第37回「唯信鈔文意」研究会
- 5・26 第109回英訳「教行信証」研究会「真宗の英語表現と海外伝道―問題点と可能性―」武蔵野大学教授・田中ケネス氏（文京区・東京カテドラル）
- 5・26 第13回鈴木大拙訳「教行信証」の考究
- 5・26 第110回英訳「教行信証」研究会
- 6・1 第24回（通算・第75回）連続講座「親鸞思想の解明」（東京国際フォーラム）
- 6・1 情報誌「世に」第17号、研究誌「現代と親鸞」第18号、機関紙「親鸞仏教センター通信」第30号を発行。

現代と親鸞の研究会・第31回

グローバリズムの現在

慶應義塾大学経済学部教授 金子 勝



金子 勝氏

2008年11月16日、メトロポリタンプラザ（豊島区）において、慶應義塾大学経済学部教授の金子勝氏をお迎えして「グローバリズムの現在」をテーマに「現代と親鸞の研究会」を開催した。市場原理主義に基づくグローバリズムが全世界的な金融危機をもたらすなど悲惨な結末を迎えつつある現在、自由と平等の実現を基本に経済問題に取り組む金子氏に、グローバリズムの問題点とこれからの対応について語っていただいた。その一部を紹介する。

(嘱託研究員 本多雅人)

■ グローバリズムの現状と帰結

100年に一度の経済危機と言われる現在、今一番失われている視点が歴史です。未知のリスクや事態に対して完全に予見し対処するということは不可能に近いのです。結局、新しい時代で新しい価値を見いだしていくには、歴史を知ることができないと思うのです。

グローバリズムは、為替レートを変動相場に切り替えて金融自由化をしていったオイルショック後のやり方が限界に到達した結果、世界中に伝染するような金融危機をもたらしてしまったのです。政治や社会が変化するのは、それまで支えてきた一つのシステムや理念、理論をとことん推し進めていった結果、正反対のシステムや理念によってしか救えなくなってきた時なのです。金融自由化を進めた国ほど被害が大きく、国家破産の危機に直面してしまったのです。こんなことは大恐慌期にはなかった現象

なのです。

世界でどうやって金融危機を克服するかということをめぐる、新しいルールを構築することが必要ですが、各国の利害対立が噴出してしまっていて、ルール形成は非常に難しい状況です。各国の同意が必要になるというところで、グローバリゼーションの限界が完全に露呈しているわけです。アメリカ中心でグローバル化していけば、全部うまくいくはずだったのです。だから、プッシュは一国決定主義というか単独行動主義で突っ走ってきたのですが、どうも国際協調主義を取らないといけなくなったのです。これはある意味でオバマが取っている外交戦略でもあるわけですが、なかなかそう簡単には収まりがつかない状態になっているのだと思います。

グローバリゼーションは、否が応にも規制緩和と自由化が求められます。そして、労働市場を含めてさまざまな分野で競争を余儀なくされていくので、格差を是正していくような、あるいは税金を確保するといったような国家の役割を相対的に低下させてきました。それをそのまま認めていくと、先進国と途上国、特に非産油途上国との間では大きな格差が生まれてきます。国内を見ても、貧富の格差がますます拡大し、固定化していきます。国がそういうことに対して役割を負うはずだったのが、グローバルなやり方を認めていくと、とてもそれらの防御壁にはなれないのです。一方で、安直な国の役割を求める動き、つまりナショナリズムや民族意識といったものが凄く高まり、地域間の紛争や内乱が多発するようになります。これも大恐

慌期以来の一つの特色です。大恐慌期と似ているのですけれども、現代は国際的なルールでそれを解決していかなければならないのです。かつては戦争で勝ったほうがすべてのルールを決めていたのですが、今は先進国同士が戦争をすることは不可能です。どうやってこの利害対立を協調して収めていくのか、という難しい課題に直面しているのです。

■ 何を為すべきか

では、こういう社会状況の中で何を為すべきなのかということを次に考えなくてはならないわけです。これも、やはり目先の利益に合わせたような動きで対処することは出来ません。結局のところ、大きな流れで考えるしかありません。

オバマは、エネルギー転換という方向性を打ち出しています。ところが日本の場合には、そういう転換が出来ません。小泉政権はブッシュに追従してきたので、環境エネルギー政策は大きく遅れてしまったのです。

それから、小泉改革のツケのもう一つは異常な低金利を続けてきたことです。リフレーション派というのですが、物価上昇がゼロになるまで量的金融緩和政策をとり、あるいは超低金利を継続しました。その一方で、構造改革で新しい産業を生み出すはずだったのですが、それが出来ずに雇用や社会保障をズタズタにして格差を拡大してしまったのです。金融のほうではアクセルを踏んでいて、構造改革のほうでブレーキを踏んでいるわけです。内需は全然盛り上がりません。それでいて新しい産業は出てこない。結果、円安を誘導することにしかならないのです。世界同時不況になると、輸出だけで成長しているような経済というのは脆いわけです。内需が形成されてないまま輸出だけを頼りに成長していったわけですから、その輸出がこけてしまうとどうにもならないのです。小泉改革の場合は、政策は全くのピンボケだったのですが、それに対してみんなが熱狂したわけです。それが冷めているのが今の段階です。それでありな

が「チェンジ」が出来ないという、この国の体質のようなものが露わになっているのです。

大きな流れで考えれば、環境エネルギーが鍵になると思います。オバマは、今は歴史的なニューディールだと言っていますが、そういう大転換の波に乗っていかなくてはいけないと考えているのだと思うのです。私たちは、今そういう意味での大きな転換点にいるにもかかわらず、金融立国を目標として以降の産業戦略を失ったままなのです。

最後になりますが、このような時代の中で、歴史の中で生まれてくる、こういう大きな格差や人々の出口のないような不安感に対して、真宗は何を提供し得るのか。この状況の中で宗教原理主義や似非宗教といったものが台頭していますが、現代に民衆的な宗教として生まれた真宗の伝統がどういう形で浸透していくのかということを、私は逆に知りたいのです。

(文責：親鸞仏教センター)

※金子勝氏の問題提起と質疑は、『現代と親鸞』第19号(2009年12月1日号)に掲載予定です。

金子 勝(かねこ まさる) 慶應義塾大学経済学部教授
1952年、東京都に生まれる。東京大学大学院経済学研究科博士課程修了。法政大学経済学部教授などを経て、現在、慶應義塾大学経済学部教授。専門は財政学、制度の経済学。著書に、『反グローバリズム』『市場』『金子勝の食から立て直す旅』(以上、岩波書店)、『閉塞経済』『セーフティーネットの政治経済学』『戦後の終わり』(以上、筑摩書房)、『市場と制度の政治経済学』(東京大学出版会)、『粉飾国家』(講談社)、『日本再生論』(NHK 出版)、また、共著に『世界金融危機』『反ブッシュイズム1〜3』『逆システム学』(以上、岩波書店)、『環境エネルギー革命』(アスペクト)など多数。



「現代と親鸞の研究会」(豊島区の「メトロポリタンプラザ」で)

■ 第1回「親鸞仏教センター研究交流サロン」を開催 (2009年2月26日)

親鸞仏教センターは、2001年7月の設立以来、多くの有識者の方々と交流・対話を重ねてきましたが、設立8年目を迎えた本年、当センターと有識者の方々との間のみならず、有識者相互間の更なる研究交流をめざし、「親鸞仏教センター研究交流サロン」を開設しました。

第1回は、「20世紀アメリカ文化と現代」をテーマに、物理学者の國府田隆夫氏(題:「文化と文明という視点から」)、埼玉大学教養学部教授の有賀夏紀氏(題:「オバマ大統領就任の意味」)のお二方から発題していただき、その後、約30名の参加者全員で熱心に意見交換しました。

発題では、國府田氏(=写真上)からは、「文明とは誰もが参加できる普遍的、合理的、機能的なものを指し、文化とはむしろ不合理なものであり、特定の集団においてのみ通用するもので、他に及ぼし難い」という司馬遼太郎の定義を引きながら、「アメリカは多文化社会、つまり文明社会である。今後、文明・文化の二項対立ではなく、それらを超えたものを作っていくか悩まなければならない。その時のキーワードは宗教ではないかという気がする」、続いて、有賀氏(=写真下)から、「多文化主義の社会は、他の文化や人権を尊重することが前提条件であり、多民族国家であるアメリカを統合してきた。オバマ氏の大統領就任は、その成果の一つだと思う。現在、グローバル化の進行に伴い、多様な民族・人種の共生が世界の各地で見られるようになった。移民が問題化している国も多々ある。そこで、この多文化主義は、多様な民族・人種が平和に共生していくための有効な原理となり得るかという問いを提起したい」とそれぞれ、貴重な提言をいただいた。

今後も、親鸞仏教センターでは、「研究交流サロン」を継続開催し、この時代を生きる人間の課題を接点とし、各分野の有識者の方々と交流を深めながら、親鸞聖人の思想、信念を表現していく当センターの活動を展開していきたいと考えている。

※「親鸞仏教センター研究交流サロン」の講演記録は、『現代と親鸞』に掲載の予定です。



親鸞仏教センターの発行物をご自宅にお届けします。

年会費1,000円(送料込)で、情報誌『アンジャリ (añjali)』(年2回)と機関紙『親鸞仏教センター通信』(年4回)をご自宅にお届けします。ぜひ「アンジャリの会」にご入会ください。知人や友人等のご紹介もお受けします。また、バックナンバーのご希望も承ります。

■申し込みと問い合わせは、

親鸞仏教センター内「アンジャリの会」T係
TEL 03-3814-4900
FAX 03-3814-4901
E-mail shinran-bc@tomo-net.or.jp

まで。

会員
募集中!

あ と が き

今、世界を覆う経済危機をどうとらえていけばよいのか? 経済を専門にしておられる方から学びたいということと同時に、経済と親鸞仏教がどこで関係してくるのか。「現代と親鸞の研究会」での金子勝先生との対話で、どのような視点を提起いただけるかと期待感がふくらんだ。経済危機にあって新しい時代、新しい価値を見いだしていくには、「歴史を知る視点」が欠かせないとおさえ、「出口のないような不安感に対して、真宗は何を提供し得るのか」という金子先生の問題提起(本紙報告)に、明確に回答する言葉をもっていない自分自身を知らされた。親鸞仏教に対する期待を込めた真摯な問いかけに、知識で応える限界を知り、そこから交流が始まると感じ、あらためて対話する機会をもちたいと思った▼〈シリーズ往復書簡「生命への問い」—現代科学と親鸞仏教〉というタイトルで、NPO法人「場の研究所」所長・東京大学名誉教授の清水博先生と本多弘之所長の往復書簡が、『春秋』(春秋社PR誌)2009年2・3月号から連載されている。清水先生には「公開講演会2007」で、生命を科学の視点からとらえ

ることと宗教の世界との接点について問題提起をいただいた(『現代と親鸞』第16号掲載)。往復書簡では、〈いのち〉の科学と宗教の間に橋を架けたいという願いで、特に浄土真宗、親鸞の思想との対話をとおして、共存原理に従って生きる「新しい時代の人間像」を明らかにされつつ親鸞思想への共感を語られる。ぜひ、お二人の書簡による対話をお読みいただきたい▼「アンジャリ」第17号には、報道写真家の高橋邦典さんに「戦争取材から学んだこと」を執筆いただいた。高橋さんは、世界のさまざまな戦場を取材し、特に西アフリカのリベリア共和国の内戦取材での悲惨な経験が、〈一人の人間としての人生の一つの転機になるほど重要なものだった〉と語る。またその経験から、「戦争のできる国」にしてしまう日本の「憲法9条の改正」議論に懸念を示される。「政治家を含めて、現在の日本で、戦争というものを『実感できる』人がたしてどれくらいいるであろうか?」と危惧され、〈「戦場には戦闘区域と非戦闘区域の区別などまったくない。その国が戦争をしていれば、どこにしようがまったく安全な場所など存在しないのだ」と警告される。「戦争のできる国」にすることが、何をもたらすか、よくよく問わねばならない。(木曾)